

神奈川県茅ヶ崎市・寒川町での関東大震災の跡

- 相模川東岸地域の被害と復興 -

名古屋大学減災連携研究センター* 武村雅之

Report on the Field Survey for the Memorial Matters from the 1923 Great Kanto Earthquake
at Chigasaki and Samukawa Cities in Central Kanagawa Prefecture, Japan.

Masayuki TAKEMURA

Disaster Mitigation Research Center, Nagoya-Univ., Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601, Japan

Many memorial towers and monuments have been contracted for the heavy toll of life and for the restoration of villages or cities in Southern Kanto district. Death claimed a toll of about 105,000 totally from the 1923 Great Kanto earthquake. These towers and monuments must be forever witnesses to the tragedy of the earthquake damage and spokesmen for the victim's dying wish "don't repeat such damages". However, most of them have been already forgotten by the citizens. We thought it's sacrilege and must use them for the public education of earthquake disaster prevention. This manuscript is a report on the field survey for the memorial matters from the Great Kanto earthquake at Chigasaki and Samukawa Cities in Central Kanagawa Prefecture .

Keywords: Memorial tower, Great Kanto Earthquake, Chigasaki City, Samukawa City

§ 1. はじめに

筆者は、関東大震災の慰霊碑や記念物などを訪ね、資料としてまとめる活動を行っている。2010 年には地元“ひらつか防災まちづくりの会”のメンバーの協力を得て神奈川県平塚市に残る関東大震災の慰霊碑や記念物などを調査し、資料としてまとめた[武村・篠原(2010)]。また 2011 年には、地元の“はだの災害ボランティアネットワーク”のメンバーとともに神奈川県秦野市で調査し、同様の資料をまとめた[武村(2011)]。また、2012 年には現在の東京都 23 区区内を対象にした著書を出版した[武村(2012)]。

活動の目的を具体的に述べると、郷土に残る震災の跡を目の当たりにし、震災を体験した当時の人々が慰霊碑や記念碑に込めた思い、例えば「二度と同じような境遇に陥って欲しくない」という意思を、市民に受け止めていただくことで、日頃の防災意識の向上に繋げようとするものである。科学的理屈も重要で

あるが、“ヒト”に大きく関わる地震防災にとって、感性に直接働きかけることも重要である。そのための手引きとして、このような資料が必要ではないかと考えている。

今回は、相模川を挟んで平塚市に相對する茅ヶ崎市ならびに寒川町での調査を実施し本稿をまとめた。現地調査は 2012 年 7 月 1 日と 7 月 14 日と 7 月 22 日の 3 度にわたり行った。

§ 2. 茅ヶ崎・寒川と被害

現在の茅ヶ崎市は、当時の神奈川県高座郡茅ヶ崎町と同小出村の一部が 1955(昭和 30)年に合併してできたもので、南西部(旧茅ヶ崎町)は主に相模川の河口に形成された砂州地帯、北東部(旧小出村)は相模原台地の丘陵地帯に属している。一方同寒川町は 1940(昭和 15)年の町制施行以前は寒川村であったが、占有地域はほとんど変わっていない。町

* 〒464-0029 名古屋市千種区不老町
電子メール: takemura.masayuki@b.mbox.nagoya-u.ac.jp



図1 茅ヶ崎市内ならびに寒川町内の主な河川、鉄道、道路と調査地点
 Fig. 1 Map of the Chigasaki and Samukawa area and locations of survey points.

内の大半が相模川に沿う沖積平野に属している。市町内を流れる河川は何れも相模川に流れ込むもので、茅ヶ崎市内には小出川に流れ込む千ノ川が東から西に流れ、小出川は北東から南西方向に寒川町と茅ヶ

崎市の境に沿って流れたあと茅ヶ崎市内に入り、相模川の河口手前で同川に流れ込んでいる。一方寒川町内には北東から南西方向に目久尻川が流れ茅ヶ崎市との境の手前で相模川に流れ込んでいる(図1)。

表 1 当時の 3 町村の被害のまとめ[諸井・武村(2004)による]

Table 1 Summary of damages for old municipalities in Chigasaki and Samukawa area.

町村名	人口	世帯数	全潰	半潰	焼失	全潰率(%)	倒潰率(%)	死者	死亡率(%)
茅ヶ崎町	17448	3229	1713	736		53.1	75.8	81	0.46
小出村	3743	594	384	102		64.6	81.8	7	0.19
寒川村	5302	902	541	203	1	60.0	82.5	12	0.23

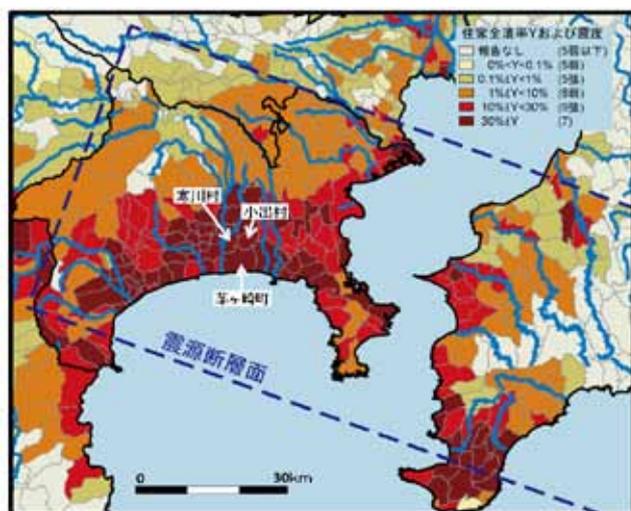


図 2 震源断層と対象地域(当時の 3 町村)の周辺の震度分布[諸井・武村(2002)より作成]

Fig.2 Location of source fault and seismic intensities around the Chigasaki and Samukawa area.

表 1 は諸井・武村(2004)を元にまとめた 1 町 2 村の被害の総数である。揺れはいずれの地域も震度 7 (全潰率 30%以上)に達し、住宅の被害は全潰率で 60%内外、倒潰率(当時の定義では全半潰率のこと)で 80%とほぼ全てが大きな被害を受けたことが分かる。これで見ると先に指摘した地盤条件の差の違いは明瞭に見られない。図 2 は諸井・武村(2002)による周辺地域も含めた住家全潰率から求められた震度分布と震源断層の位置である。対象地域の 3 町村はほぼ震源断層の直上に位置し、震度 7 の地域の中でも震源からの震動が特別に大きな場所では、耐震性が低い当時の家屋が、地盤条件による揺れの差を充分著わす指標となっていない可能性も考えられる。

また死者数は全体で 100 名に及ぶが、死亡率で見ると最大の茅ヶ崎町でも 0.46%で、武村・篠原(2010)が調査した相模川の対岸の平塚町の 2.3%や横浜市の 6.6%に比べると低い。これは、この地域で火災が殆ど発生しなかったことや紡績工場で大量の犠牲者を出すことがなかったことなどが大きな原因と考えら

れる。

『大正震災志』上巻[内務省社会局(1926)]の神奈川県高座郡の項からこれらの地域の被害を拾うと、まず挙げられているのが、相模川河口の茅ヶ崎町大字柳島における耕地の低下と河口部の隆起に伴う小出川の排水不能による耕地や住宅、道路の浸水である。また寒川町以北でも相模川沿岸の目久尻川や鳩川(座間市、海老名市などを流れる相模川の支流)の堤防の崩壊で田んぼが荒廃した。また主要作物の甘藷が京浜方面の被害で需要が激減した。さらに建物倒壊などの影響で蚕の飼育が不能になった。漁業方面では津波による漁船漁具の被害も軽微ではないが、最も大きな損害は柳島浦漁業組合地区の隆起による商漁場の変化と、ここでも茅ヶ崎市柳島の隆起の影響が指摘されている。

また、西坂(1926)によれば、茅ヶ崎町で製糸工場の純水館が大きな被害を受けたこと、寒川村での火災は宮山の農家が倒潰し竈から火が出たのが原因であること、寒川神社の本殿が半潰したことなどが挙げられ、さらに茅ヶ崎町の下町屋では水田中から古代橋梁の橋脚九本が震動に揺揚げられて出現したことなどが書かれている。

また、武村・篠原(2010)が示す『震災地応急測図原図』[井上(2008)]は地震直後の被災状況を伝える貴重な資料であるが、そこには茅ヶ崎町内の東海道沿線の被害も記録されており、主な地点の倒壊率を拾うと、辻堂で 2/3、小和田宿で 1/2、本村で 1/2、茅ヶ崎駅の南の南湖で 2/3、松尾と柳島で全部倒壊、下町屋で 2/3、今宿で 7/10、中島で 8/10 などの数字があり、相模川に近づくほど被害が大きくなることが分かる。また地変に関する記述も相模川の近くにあり、柳島付近の東海道線には「鉄道線路凹陷し破損大」、下町屋と今宿の間の東海道には「道路亀裂大にして自動車は通ぜず」、今宿と中島の間では「大断層にして自動車の通過困難」などと記録されている。

§3. 調査地点

調査地点は図1に示す19地点である。茅ヶ崎市内にある石碑については塩原(1991)にまとめられている。また寒川町内については寒川町史編集委員会(1999)にまとめられている。郷土資料の調査からこれらに掲載されていないものも見つけて現地調査を行い、できるだけ忠実な碑文の記載を心がけた。その際これらの資料の記録に誤りを見つけたものについては、そのむねを(注)として記載した。

(1) 三島神社(茅ヶ崎市萩園)

所在地は萩園集落内で、国道1号線の今宿交差点から萩園通りを北へ1.3km余り行ったところにある萩園バス停手前200mのところである。神社の境内には関東大震災に関する2つのモニュメントがある。一つは「橋石」と言われるもので境内に入ってすぐ左側の通りに面したところにある。1981年に萩園郷土会有志、萩園自治会、茅ヶ崎郷土会によって建てられた説明板に以下のような記載がある。

この巨石は、小出川に架かっていたもので、番場川の橋といって村人に親しまれていた。

大正十二年九月一日・関東大震災にあい、堤防と共に、ことごとく崩壊した。間もなく河川改修が行われ、現在の萩園橋として装いを新たにした。

江戸時代中期に建造されたものと推定されるが、川巾四間・橋巾一間にこの巨石を使用した。当時としては、相当な大工事であって、村人には大きな負担が課せられたたであろう。それ故に、此处が如何に重

要な街道であったか起想される。

小さい方の石は、側面に「元禄十四年三月」の記念銘があり、貴重な橋に使用されていたものと推定されるので、村の中央を貫いている八王子街道の石橋の十字路にあったものと思われる。

何れも萩園の歴史を物語る重要なもので、後世に残すべくここに保存する。

図3が「橋石」で、写真右側の石には以下の記載がある

(正面)

小出川 橋石

(裏面)

昭和56年7月15日建立

萩園自治会 萩園笑寿会 萩園郷土会

また左側の小さい石の側面には説明板にある通り「元禄拾四年三月」の文字を確認できる。説明板にある萩園橋は萩園バス停からさらに300mほど北へ行った番場バス停の先を東に入ったところにある。小出川に架かる橋で昭和56年以降再度架け替えられたと思えるモダンな橋となっている。また地元の農家の方に伺ったところ、八王子街道というのは萩園通りのことで、石橋は現在の萩園バス停付近のことを指すようである。

三島神社内にはもう一つ境内の左奥に図4のような関連の石碑がある。石碑には以下のような碑文が刻まれている。



図3 萩園の三島神社にある橋石

Fig. 3 Monument Hashiishi (bridge stone) of Mishima Shrine in Hagazono area of Chigasaki.



図4 三島神社にある震災記念碑

Fig. 4 Memorial tower for restoration of Mishima Shrine.

(正面)

式島社殿改築之碑(題額)

大正十二年九月一日關東之地大震其慘禍及一府四縣矣就中相模川沿岸最劇烈如我萩園里居家百四十而其過半全壞死者二傷者亦十余加之地皮龜裂而道路橋梁溝洫堤塘莫不悉壞崩被害之甚大蓋前古未曾有也如村社三島神社亦不能免斯災厄其華表倒其社殿覆悽慘之狀不可名狀聖上軫念爰賜資金賑恤焉各地有志亦倣焉災後不日而向復興之運者不有不由 聖恩之渥與同情之深而里民深歎社殿壞頽困厄之際夙立再建之議競獻其資拮据經營遂至復其舊觀矣敬神之篤可以欽也及記事由勒貞珉以 諗後世云爾

大正十四年三月衆議院議員勲四等山宮藤吉誌

(裏面)

社掌 能條守太郎

氏子総代人 野崎善太郎 (他3人の氏名)

世話人 菊池重太郎 (他18人の氏名)

(注)塩原(1991)記載の正面碑文6カ所訂正

題額にあるように震災で倒壊した三島神社の社殿の再築記念に建てられたもので、萩園集落の被害として、住家140軒の過半が全壊、死者2名、負傷者10余名を出し、地面に亀裂が走り、道路・橋梁・河川・堤防など悉く崩壊したと記されている。また碑文を書いた山宮藤吉は萩園出身で、茅ヶ崎・寒川地域を代表する明治・大正期の政治家である。書にも通じ、以後紹介する他の石碑でも撰文や書を多く残している。境内には遺徳を称える「山宮藤吉翁之碑」もあるので、それに沿って以下に略歴などを示しておく。

文久二年三月二十九日萩園村に生まれる

明治26年鶴嶺村村長となる

明治32年神奈川県議會議員に当選(改進黨)

明治35年、大正4年、大正13年の3期、衆議院議員に当選

大正5年 勲四等瑞宝賞受賞

昭和8年1月4日東京慶応義塾大学付属病院で病没 行年72才 “書をよくして鶴園と号し、清廉温雅の言行は郷党の崇敬を集める”

(2) 松尾大神(茅ヶ崎市今宿)

所在地は国道1号線の今宿交差点から200mほど萩園通りを北へ行ったところである。境内に入っすぐ右側に道路に面して関連の石碑が建っている(図

5)。正面が道路に面しているのは、多くの人に知らせたいという配慮であろうか。碑文は以下の通りである。

(正面)

震災記念碑(題額)

大正十二年九月一日關東二大震アリ山嶽崩レ田野裂ケ河海溢レ堤塘潰工家屋倒レ火災起リ人畜ノ死傷極メテ多ク實ニ曠古ノ參事タリ相模川沿岸我が今宿里ノ如キ八震源ノ地ニ近キヲ以テ震度甚ダ激シク地表決裂シ至ル所ニ水ヲ噴キ家屋殆ド倒潰シテ里民一時居住ニ窮シ飢餓ニ迫リ慘憺ノ狀得テ言フベカラズ爾來全里協同カラ復興ニ盡スコト四年漸ク其ノ緒ニ就キ村社松尾神社ノ再築亦々已ニ竣リ里民敬神ノ誠ヲ發揮スルヲ得タリ因リテ碑ヲ建テ文ヲ刻シ以テ後人ニ傳フルコト此ノ如シ

昭和二年四月一日 出口彦太郎謹誌

(裏面)

「氏子人名」として、4段に渡り合計48名の名が刻まれている。そのうち上段の最初3名は「総代人」と書かれ、その筆頭が出口彦太郎である。

(注)塩原(1991)記載の正面碑文7カ所訂正

震災で倒壊した松尾神社の社殿の再築記念に建てられたものである。社殿に向かって右側の燈籠には「明治四十五年三月社殿改築時建之」とあり、関東大震災で倒壊した社殿は明治45年に建てられたも



図5 松尾大神にある震災記念碑

Fig. 5 Memorial tower for restoration of Matsuo Shrine in Imajuku area of Chigasaki.

のであったことが分かる。今宿の被害については家屋が殆ど倒壊したと書かれ、「地表決裂シ至ル所ニ水ヲ噴キ」ということから、地盤の液状化現象が甚だしかったことも分かる。

(3) 旧相模川橋脚(茅ヶ崎市下町屋)

所在地は国道1号線が小出川を渡る下町屋橋の東南の袂で、「国指定史跡 旧相模川橋脚」という標柱が建っているの直ぐに分かる。関東地震と翌年に起きた丹沢の余震で、水田の液状化に伴って土中から太い木の柱が何本も出現し、歴史学者の沼田頼輔によって鎌倉時代に相模川に架けられた橋の遺構(橋脚)と考証され、1926(大正15)年に国の史跡に指定されたものである。

2001年から2007年まで保存整備が進み、地震による出現時の状況を正確に保存すべく、図6に示すように精巧なレプリカが作成され、その下に実物が保存されている。この地点に相模川に架かる橋があったということは、相模川の本流は現在より約1.2kmも東に蛇行していたことになり、敷地内には明治15年作成の迅速測図に見える蛇行跡の説明模型もある。

敷地奥には調査者の沼田頼輔が詠んだ橋の由来が「湘江古橋行の碑」として、1970(昭和45)年に建立されている。また敷地の入り口付近には震災後の大正14年から昭和15年にかけて行われた付近の耕地整理の記念碑が茅ヶ崎町湘東耕地整理組合によって建立されている。



図6 地盤の液状化で出現した旧相模川橋脚の遺構
Fig. 6 The relic of piers of old bridge in Kamakura period emerging with the soil liquefaction due to earthquake.

(4) 千ノ川(茅ヶ崎市下町屋)

下町屋付近の千ノ川は震災後にこの地域の水流を安定させるために開削された新しい河川であり、特に記念碑などがあるわけではないが取り上げた。湘南地域は地震による地殻変動で1m程度隆起し茅ヶ崎町の海岸沿いでもその影響は少なからず表われた。

中でも柳島地区は地形そのものが大きく変わってしまった。図7は現在の河川と震災前の河川の比較である。現在、小出川は国道1号線の下町屋橋(A地点)からほぼ直線的に相模川河口に向けて流れているが、震災前は大きく南に迂回して現在の鳥井戸橋(B地点)付近で千ノ川と合流して松尾川となり点線の経路を経てC地点で相模河口から入江のように延びる水路に注いでいた[自治会・五三会(1990)]。江戸時代にはさらに広い入江で柳島湊として栄えたという。

ところが地震によって河口付近の河原地域が隆起して港が完全に消え、松尾川の水も出口を失って現在の浜見平団地付近に滞留した[茅ヶ崎市(1981)]。水は次第に田んぼだけでなく畑にも浸水し、排水のために村民総出で堀割工事を行ったという記録もある[自治会・五三会(1990)]。

結局は県営で工事が行われ、千ノ川を西に延ばして小出川との合流点を現在の湘東橋のやや上流、図7のD地点とした。図8はその際に掘られた千ノ川の延長部の現在の様子である。さらにD地点から



図7 地震前後の柳島付近の河筋の変化
Fig. 7 Change of the course of rivers in Yanagishima area before and after the earthquake.

現在の柳島小学校近くの宮の下橋付近(E 地点)を通りポンプ場付近を經由して相模川への河道が確保されるようになった。1926(大正 13)年ころのことである。翌年ポンプ場付近に逆流を防ぐ閘門が設けられて、柳島をめぐる水流がようやく安定するようになったと言われている[茅ヶ崎市(1981)]。なお、現在のように宮の下橋(E 付近)から真進する水路が整備されたのは戦後の 1957(昭和 32)年から始まる小出川改修工事によるものである。

このように、海岸の隆起は住民に大きな被害を与えた一方で、今まで湿地で耕作が出来なかった河原地域が農耕地に適するようになったという幸運ももたらした。さっそく国や県に開墾の手続きを取り、住民総出で立派な畑にしたという。また毎年のように繰り返されてきた大水の被害も少なくなったという証言もある[自治会・五三会(1990)]



図 8 地震後延長された千ノ川。上流に鳥井戸橋。
Fig. 8 The part of Chinokawa River extended after the earthquake.

(5) 神明神社(茅ヶ崎市松尾)

所在地は国道一号線下町屋の旧相模川橋脚から南へ 500m ほどのところで、千ノ川、東海道線を渡ってすぐのところである。隣に善性寺という寺がある。社殿に向かって鳥居の左側の道路脇に関連の石碑がある(図 9)。碑文は以下の通りである。

(正面)

大震災記念碑(題額)

大正十二年九月一日関東ノ地ヲ襲ヒタル大地震八曠古無比ノ惨事ニシテ就中当部落ハ被害激甚ヲ極メ一時八阿鼻叫喚ノ巷ト化シ鬼哭愁々将二世ノ終焉ヲ告クルノ思ヒアリシモ幸ニ神明ノ加護ト擧郷

一致ノ努力トニ因リ克ク災後ノ復興ニ善處シ今ヤ社殿ノ再築ヲ竣リ特ニ青年八參道敷石ヲ奉献シテ民心崇敬ノ中軸ヲ確立セリ仍テ茲ニ碑ヲ建設シ永ヘニ追憶反省ノ規準タラシム云爾

(裏面)

大正十五年四月八日建之

区長 内藤勇治郎

宮総代 内藤銀蔵 青木百次郎

建築委員 (18人の氏名)

青年 幹事 青木金之助 青木松太郎

(以下 15 人の氏名)

(注)塩原(1991)記載の正面碑文 4 カ所訂正

全部で 38 名の名が刻まれているが、そのうち 9 名は内藤姓、他は全て青木姓である。倒壊した神社の再建記念碑であることが分かる。「永へニ追憶反省ノ規準タラシム」というくだりに、二度とこのような惨事を繰り返さぬようにとの願いが込められているように感じる。



図 9 神明神社の震災記念碑

Fig. 9 Memorial tower for restoration of Shinmei Shrine in Matsuo area of Chigasaki.

(6) 八幡神社(茅ヶ崎市柳島)

所在地は国道一号線下町屋の旧相模川橋脚から南西へ 700m ほどのところで、小出川に架かる湘東橋から南西へ 300m ほどの所にある。社殿に向かって鳥居のすぐ左に建つ記念碑は「八幡宮復興記念碑」と書かれている。自治会・五三会(1990)によれば、神社は関東大震災で倒壊したあと、氏子の協力で一旦倒壊前の姿に再建されたが、昭和 20 年 7 月の平塚空襲の際に再度全社烏有に帰した。戦後、再び氏

子らの努力で拝殿、神楽殿、神輿などが再建され、その際の記念碑である。

一方、鳥居には「大正拾五年九月吉日」「復興新建氏子中」と刻まれ、震災復興による鳥居であることが分かる(図 10)。また記念碑の横には、鳥居の残骸で造られたモニュメントがある(図 11)。石柱から以下のような文字を読み取ることができる。

文政五年午四月十五日建之

當所 総氏子中

發意 藤間善左衛門

世話 青木由右衛門

山口仙右衛門



図 10 震災後再建された八幡神社の鳥居

Fig. 10 The torii of Hachiman Shrine in Yanagishima area of Chigasaki, restored after the earthquake.



図 11 八幡神社にある震災により壊れた鳥居の残骸で作られたモニュメント

Fig. 11 The monument at Hachiman Shrine made from the materials of torii destroyed by the earthquake.

つまり、この鳥居は1822(文政五)年四月十五日に氏子の総意で建設されたもので、関東大震災で倒壊したまさにその鳥居である。現在の鳥居の文字には朱が入れられており、今でも地元住民によって神社が大切に護られていることが分かる。

(7) 真言宗善福寺(茅ヶ崎市柳島)

八幡神社から東へ150mほどのところにある善福寺にも、震災復興の記念碑がある(図 12)。山門を入ってすぐ右側にある碑には以下のような碑文が刻まれている。

(正面)

柳島山善福寺復興記念(題額)

大正十二年九月一日関東乃地大に震ひ當地方最も劇甚を極む柳島の地民家全部殆と倒壊し死傷数名當山本堂庫裏亦其数に漏れず災後壇信徒相議して其復興を企図し昭和六年八月三日落成供養法會を執行し其梗概を石に勒して以て不朽に傳ふと云爾
昭和七年三月 山宮藤吉書

(裏面)

本堂建築委員 (9人の氏名)

世話人兼建築委員 (8人の氏名)

建築請負棟梁 (2名)

柳島山善福寺住職井上壽山代

(注)塩原(1991)記載の正面碑文2カ所訂正



図 12 善福寺の震災記念碑

Fig. 12 Memorial tower for restoration of Zenpuku-ji Temple in Yanagishima area of Chigasaki.

柳島では家が殆ど倒壊し、死傷数名が出たと記されている。自治会・五三会(1990)によれば、柳島での全壊は158戸(率にして98%)、半潰3戸(同2%)で、死者は男10名、女12名の合計22名であり、死者は碑文の記載よりやや多い。書は先に紹介した萩園の山宮藤吉である。また裏面にある住職の井上壽山は第18世にあたり1921(大正10)年から1959(昭和34)年まで住職を務めた。

(8) 共同墓地(茅ヶ崎市柳島)

柳島小学校[1969(昭和44)年創立]の近く、現在はずぐ横まで住宅があるが、震災当時は村落のはずれだった場所に共同墓地がある。その共同墓地の北の角に小さな石造りの観音像が建っている(図13)。台の丸い部分(正面)とその下の台石の(裏面)に以下のような碑文が認められる。

(正面)

享和三亥年霜月廿四日
 當村觀音講中建設中途
 亡埋のごとに發掘再建
 當墓地整理の淨財で
 九月一日關東大震災為
 横死者拾三回忌に相當
 するを以て兩記念の為
 に觀音菩薩之御像を
 茲にこれを供養安置す
 施主 柳島一同
 昭和十年二月吉日

(裏面)

善福寺住職 井上壽山代
 諸事擔任者 藤間善左工門
 青木長次郎
 寺世話人 藤間政次郎
 松寄倉吉
 區長 平牧稻吉
 副區長 永野治三郎
 區主計 青木源四郎
 評議員 北村徳太郎
 須藤弥三郎
 青木房吉
 山口鉄五郎
 善左工門老 七十四才書
 相州石工 富田茂次刻

正面に書かれた文字は劣化していて大変読みにくく多少誤りがあるかもしれない。震災後の墓地整理の完成と13回忌を兼ねて、1803(享和三)年からあったとされる観音菩薩像を墓地整理の浄財によって整備、供養し安置したということであろうか。井上壽山は先に述べた善福寺の18世住職、諸事擔任者の藤間善左工門と青木長次郎の二人は善福寺の復興記念碑にも世話人兼建築委員の筆頭に挙げられており、自治会・五三会(1990)によれば、善福寺の檀家総代であったという村の長老である。藤間善左工門は正面の書も書いたようでその際74才とあるから1862(文久二)年ころの生まれである。

藤間家は今も続く旧家で、代々柳島村の名主を務め柳島湊の回船問屋として栄えた。特に十三代目の藤間柳庵(1801-1883年)は本名を善五郎と言い文人としても有名で昭和55年に「かながわの百人」の一人にも選ばれている[茅ヶ崎郷土会(1983)]。八幡神社にある1822(文政五)年の鳥居の建設を発意した藤間善左衛門はその父であり、関東大震災の時の善左工門はその子か孫であろうか。柳島小学校の近くにある藤間家は今も広大な敷地をもち屋敷内には「藤間資料館」があり、また関東大震災で崩れた建材なども残されているという。



図13 共同墓地にある震災の犠牲者を供養する観音像
 Fig. 13 The Kannon figure in the Yanagishima graveyard erected for the souls of victims due to earthquake.

(9) 金刀比羅神社(茅ヶ崎市南湖)

国道一号線の茶屋町、現在の南湖入口交差点から南へ東海道線の松葉屋踏切を渡ると南湖上町である。柳島に近い南湖の海岸付近には医師高田畊安

によって1899年に開院した結核療養所である南湖院があったことで有名で、国木田独歩など多くの著名人が入院している。

震災直前から入院していた歌人の岩谷莫哀の「茅ヶ崎日記」は津波避難などその時の様子を伝えている[茅ヶ崎市(1978)]。幸い津波による直接の被害は無く病棟も無事で入院患者は全員無事であったが、薬局一棟が全焼し職員家族など2名が圧死した[大島(2011)]。

茅ヶ崎市文化資料館南湖郷土誌編集委員会(1995)によれば、相模川に架かる馬入川鉄橋が地震で落ちたために、直後、汽車は松葉屋踏切に設置された仮設の停車場で折り返し運転がされており、茶屋町付近は西へ向かう沢山の罹災者で終夜を問わず雑踏になっていた。また金比羅神社のある上町では、全壊住宅110戸、半潰住宅134戸、死者5名、負傷者10名の被害を出したと記録されている。

金比羅神社の震災記念碑は拝殿の上り口の石段左横に建っている(図14)。標柱のようなもので詳しい記載はないが、碑文は以下のように読める。

(正面)

震災記念碑

(裏面)

大正十貳年九月壹日

大正十參年九月壹日建之 上町部落

(注)塩原(1991)記載の裏面碑文2カ所訂正



図14 金刀比羅神社の震災記念碑

Fig. 14 Memorial stone for earthquake disaster at Kotohira Shrine in Nango area of Chigasaki

建立の経緯などを近所で聞いたがよく分らない。鳥居にも「昭和十一年十一月吉日建之」「氏子中」と刻まれ、地震で本殿や鳥居などが傷み順次再興していったのかもしれない。記念碑も鳥居も刻字に朱が入れられており、現在も上町地区で大切に護られていることが分かる。

(10) 曹洞宗海前寺(茅ヶ崎市本村)

海前寺が東海道に面した現在の地に堂宇を整えたのは1912(明治45)年のことで、そのわずか11年後に起こった関東大震災によって堂宇は悉く倒壊してしまった。本格的に再建に着手されたのは1941(昭和16)年であったが、戦中・戦後の混乱で本堂・庫裏の落慶は1949(昭和24)年になってしまった。[池田(1984)]。ここで取り上げる「震災追善碑」は山門に入ってすぐ左側の塀の際にある(図15)。建立者との関係など寺に由来を伺おうとしたが存在すら認識されていないようであった。石碑は塀を背に建っており裏を見ることができず、裏に何か記載があるかどうかは分からないが正面に刻まれている事項を記載すると以下ようになる。

(正面)

震災追善(題額)

天木榮一郎氏者岐阜縣吉川町之人也
當工場在勤中大正十二年九月一日際
振古未曾有之大震災工場全壊罹殃死
之難也當時三百八十有余名之在勤者
中不幸而獨為犠牲富春秋以前途有望
之身斃於是天災可惜哉行年廿有三
大正十四年三月廿一日 純水館茅ヶ崎製糸所建之

(注)塩原(1991)記載の正面碑文2カ所訂正

碑文によれば純水館で働いていた従業員の天木榮一郎が震災で命を落とし、その追善に会社が建立した碑であると思われる。茅ヶ崎市(1981)によれば、純水館は長野県小諸町から1917(大正6)年に茅ヶ崎に進出してきた製糸工場で現在の茅ヶ崎駅と東海道との間に工場があった。経営者の小山房全は人道主義に立つ経営者で、女工の健康のための診療室を設けたり、メンタルな面に気を使ったり、女性として不可欠な裁縫などの技能を身につけさせたりもした。これらの行為は品質向上につながり、茅ヶ崎純水館は優良生糸生産工場として

全国にその名が知られることになった。

ところが震災によって工場は倒壊し、さらに横浜へ出荷中の生糸の焼失など房全は大きな打撃を受けた。その上に喜代乃夫人が圧死により亡くなった。従業員の犠牲者については西坂(1926)による『神奈川県下の大震火災と警察』によれば、3名が圧死したとされているが、碑文を読む限りは天木榮一郎1人のようである。自らも苦境の最中に犠牲になった従業員のために追善供養碑を建てるあたり房全の人道主義の一端を見るようである。その後純水館は懸命に工場再建を図るが、昭和の大恐慌が追い打ちをかけ、1935(昭和10)年の房全の死後1937(昭和12)年に廃業した。



図 15 海前寺にある純水館の社員の追善供養碑

Fig. 15 Memorial tower of Kaizen-ji Temple in Honson area of Chigasaki erected for the soul of a victim in the destroyed cotton spinning industry.

(11) 熊野神社(茅ヶ崎市小和田)

JR 東海道線辻堂駅の西北西約 1.2 km の国道一号線の小和田バス停から北に 200 m ほど入ったところに熊野神社がある。参道の入り口に「小和田総鎮守熊野神社」と書かれた標柱があり、そのすぐ後ろに今回の調査中最も大きい 3 m 余りの高さをもつ震災関連の石碑が立っている(図 16)。碑文は以下のように刻まれている。

(正面)

大震災碑(題額)

元代議士 勲四等 山宮藤吉篆額

神奈川縣町村長会長 新田信撰文

大正十二年秋九月朔日午前十一時五十八分倏惚トシテ関東ノ野ヲ襲ヒタル大地震ハ無數ノ屋舎ヲ倒シ多大ノ人命ヲ毀傷シタルノミナラズ之二次グニ劫火ヲ以テシ猛火ノ凶焰天ヲ焦シ燎原ノ火勢ハ二日二夜ニシテ殆ンド帝都ヲ廢墟トナシ帝國ノ関門タル横濱ヲ拳ゲテ灰燼ト化シ其ノ災害ノ及ブ所東京神奈川千葉埼玉静岡山梨茨木等一府六縣ノ廣キニ亘リ許多ノ財寶ト生靈トハ須臾ニシテ烏有二歸セリ加之此間交通機關杜絶シタルガ為メニ流言蜚語盛ンニ傳ハリ人心洶洶トシテ倍々其惨害ヲ大ナラシム殊ニ湘南ノ地ハ震源地帯ナリシヲ以テ凄愴ノ状最モ甚シク全地域ニ亘ル焼失並ニ倒潰家屋六十九萬四千餘戸ノ内本縣内ノ被害數實ニ二十三萬七千餘戸本町三千三百八十四戸本區熊野神社外三百戸内全潰百二十五戸半潰百七十五戸ニシテ其惨憺タル筆舌ノ能ク盡スベキニアラズ又死傷者ノ總數十五萬七千餘人ノ内本縣ニ於ケル死傷者五萬千餘人本町二百七十三人本區十四人内死者七人傷者七人ニシテ酸鼻ノ極人ヲシテ面ヲ背ケシムルノミ是レ蓋シ有史以來ノ大禍難ニシテ國運ノ伸暢ハ為ニ一頓挫ヲ来シタルノ觀アリ然レドモ災民ハ當時全国ヲ始メ遠ク欧米各国ヨリ寄セラレタル同情裡ニアリテ復興ノ志燃ユルガ如ク翌十三年一月十五日ニ於ケル再度ノ強震ニモ屈スル處ナク奮勵努力遂ニ帝都ヲ始メトシ震災前ニ數倍スル美觀ト設備トヲ施シテ復興ノ計漸ク就ナル

固ヨリ不測ノ天變地妖ハ人力ノ如何トモスルベキ所ニ非ズト雖モ災禍ノ範圍ヲ縮狭シ救済ノ道ヲシテ遺算ナカラシムルハ人事ノ敢テ能クスル所ナリ茲ニ本區復興ノ計全ク就ルニ際シ即チ鑑戒ヲ末代ニ貽シ遺範ヲ後昆ニ垂レ以テ来者ノ指針ニ供セン為メ區民相圖リテ碑ヲ建ツ云爾

昭和五年八月一日

小室政吉書

辻堂 高野宏哉刻

(注) 改行は碑文通りにした。塩原(1991)記載の正面碑文 3カ所訂正

(裏面)

最上段に「熊野神社鳥居神楽殿 寄附者連名」とあり、以下 9 段に渡り寄附金と寄附者の名前が書かれている。数えると氏子が 304 名、特志者 60 名となり、総数は 364 となる。最後左端に「建設者一同」の文字が見える。

(注) 塩原(1991)記載の総数 324 は 364 の誤り

正面の題額に筆を執ったのは、先に紹介した萩園出身の代議士であった山宮藤吉であり、町村長会会長の新田信は小和田の出身である。さらに続けて被害の状況が書かれており、それによれば茅ヶ崎町での倒潰家屋は3384戸で、そのうち本区すなわち小和田では、300戸のうち全潰が125戸半潰が175戸とあり、倒潰率は100%であったことが分かる。さらに死傷者は茅ヶ崎町全体で273人、小和田で14人うち死者は7人であると書かれている。茅ヶ崎町の全半潰数は表1に比べて碑文の数字の方がやや多めであるが、小和田も含めて全滅に近い被害を受けたところが多いことが分かる。

このような大きな災害であったにも関わらず、また翌年1月15日のいわゆる丹沢地震による再度の強震にも屈することなく、欧米諸国の支援も得て昭和5年までに我が国が復興できたと書かれている。東京で帝都復興祭が行われたのは1930(昭和5)年3月26日であった。最後に「地震のような天災は人力では如何ともすることはできないが、災禍の範囲や程度を小さくすること、さらには救済の道を事前に考え災害時にその通り実行することは人の力ではできる」ということを末代への教訓として、神社に参拝する人々の指針となるよう、小和田地区の復興が成ったことを機に碑を建てたと書かれている。

裏面にはより具体的に神社の復興に寄与した人々の名前がびっしりと書かれている。寄附金の最高額は新田信の300円、最低は氏子で1円50銭、特志者では1円である。



図 16 熊野神社の震災記念碑

Fig. 16 Memorial tower of restoration of Kumano Shrine in Kowada area of Chigasaki.

(12) 曹洞宗正覚院(茅ヶ崎市堤)

ここまでは主に茅ヶ崎市の南部、東海道に近い旧茅ヶ崎町を紹介したが、ここからは相模原台地の丘陵地にある旧小出村に移る。正覚院は相模線の香川駅の東北東約2kmに位置し、大岡越前守ゆかりの浄見寺近くの通称大岡越前通りに面して建つ禅宗の寺院である。

大きな布袋様の石像のある山門を入れてすぐ左側に参道に向いて立つ震災供養碑がある(図17)。自然石を模したコンクリート製の碑である。正面に「嗚呼九月一日」と大きく刻まれているのですぐに分かる。その左下に小さく「明月書」と署名がある。裏面には「大正十二年大震災 歿死者十三回忌」との文字が見え、以下建立者と見られる5人(亡くなった方もかもしれない)の名が刻まれ、最後に「伊藤養山建之」とある。さらにその脇に「一日 吉田政司作」と碑の製作の日付と製作者が刻まれているようであるがよく読めない。

養山は第29世で寺の話では近所の有志の方々が当時の住職と図って建立したものだということと特定の人を対象とした供養碑ではないかもしれないとのことである。建立年は読めないが、13回忌とあるので1935(昭和10)年頃だと思われる。



図 17 正覚院の十三回忌の供養碑

Fig. 17 Memorial tower of Shogaku-in Temple in Chigasaki erected for the souls of victims due to earthquake.

(13) 曹洞宗宝蔵寺(茅ヶ崎市行谷)

正覚院の北西約2kmに、同じく曹洞宗の宝蔵寺がある。石段を上り山門をくぐると左手に本堂があり、それに向かい合うように「震災記念聯芳塔」が建ってい

る(図 18). その名の通り石碑の正面中央に「當寺開山傳室宗馨和尚禪師」と刻まれ、震災当時の23世道一為元禪師まで、各代の芳名が連ねられている。裏面は上段と下段に分かれ、上段には次のように書かれている。

大正十二年九月一日突如而
 大地震動山川草木悉崩
 壊民衆吁喚尋親呼子者現
 出焦熱地獄都市不火滅三
 盡夜起流言人心恟々震域
 及一府四縣家屋全焼倒
 壊無数歿死者實稱十數
 萬當山亦伽藍大破折柱
 落壁絶言語檀信協力而
 從事復興五星霜茲竣成
 以相當開山三百年建設聯芳
 塔境内長為震災記念者也矣
 昭和二年十月一日

(注)塩原(1991)記載の正面碑文3カ所訂正

一方下段には、建設委員10名、信徒6名、檀徒18名の名前が刻まれている。裏面上段を要約すると、震災で伽藍が大破するなどの大きな被害を出したが、檀信徒の協力で5年間で復興した。ちょうど開山から三百年に相当したので、震災を長く記念するために聯芳塔を建てたと書かれている。同寺の立地する丘陵地でも伽藍を大破させる相当程度の揺れに見舞われたことが分かる。



図 18 宝蔵寺の震災記念聯芳塔

Fig. 18 Memorial tower for restoration of Hozo-ji Temple in Chigasaki.

(14) 貴船大神(寒川町田幡)

ここからは寒川町を対象を移す。貴船神社は先に紹介した正覚院とは反対方向の香川駅の西約1.5kmにある。まわりは相模川に沿う広大な田園地帯である。その一角に田端の集落があり、その中心に神社がある。説明板によると1869(明治2)年に村社に列せられたとある。石造の鳥居をくると正面に本殿があり、その左側に鳥居の残骸で造られたモニュメントがある(図19)。

モニュメントの中心に立つ石柱に「嗟呼 大正十二年九月一日之大震災」と刻まれている。また左奥の一本にはこの鳥居の建設年代とみられる「治四拾五年五月建之」の文字が残り、明治の末年にこの鳥居が作成され、関東大震災でこわれたものと推定される。また、現在の鳥居には「大正一五年九月一日再建」「氏子中」の文字が見え、震災後再建されたものであることもわかる。先に紹介した柳島八幡神社と同じく村人によって大切に護られてきた神社であり、モニュメントの建立年は不詳であるが、震災の経験を後世に伝えるために建立されたものであろう。『田端青年会日誌』[寒川町(1994)]によれば、9月18日に、青年会一同が貴船神社の災害建物を一部取片づけたとあり、その他に道路の復旧、橋梁の修理、小学校や寺院の倒潰建物の片づけなど10月に至るまで続けられたことが分かる。



図 19 貴船神社にある震災により壊れた鳥居の残骸で作られたモニュメント

Fig. 19 The monument at Kifune Shrine of Samukawa made from the materials of torii destroyed by the earthquake.

(15) 八幡大神(寒川町一之宮)

JR 相模線の寒川駅の南約 400 m には八幡大神がある。鳥居をくぐって参道を進むと本殿があり、境内に入る右側に説明板がある。それによれば「大正十二年、関東大震災により建物一切倒壊するが、同十五年、本殿等を再建す」とあり、今の本殿が震災後の再建であることが分かる。本殿の前を左にすすむと「大震災記念碑」が建っている。碑文は以下のように書かれている(図 20)。

(正面)

大正十二年九月一日十一時五十八分
大震災記念碑
衆議院議員勲四等山宮藤吉書

(裏面)

寒川村一之宮総戸数百七十六戸内全壊百六十四半
壊十二 此損害高約二十四萬六千圓

以下に 6 段に渡り人名が書かれている。一段目と二段目に歿死者として 18 名の氏名と年齢が書かれ、名前から男性 7 名、女性 11 名で年齢は 1 才から 73 才で高齢者と子供が多い。二段目の最後に「負傷者男八名、女十二名」とある。また三段目から六段目にかけては、建設に係った人で、発起人 22 名、戦友会 9 名、支部青年團 9 名の氏名で、それに続いて後援者一同とあって段組を終了し、最後に

大正十五年九月一日建之 鈴木芳勝 刻
廣田亦吉 石積

とある。ここにも「書」として山宮藤吉の名前が見える。



図 20 一之宮八幡大神にある震災記念碑

Fig. 20 Memorial tower for restoration of Hachiman Shrine in Ichinomiya of Samukawa.

(16) 寒川神社(寒川町宮山)

寒川神社は神奈川県でただ一社国幣中社に列せられていた神社で、参道入り口は JR 相模線の寒川駅の北西約 600 m にあるが、本殿は宮山駅の南南東約 400 m で長い参道の 1/3 本殿側に太鼓橋と三ノ鳥居がある。三ノ鳥居をくぐってしばらくすすむと右側に石造の鳥居の残骸があり(図 21)、立て札に以下のように記されている。

この鳥居は当神社の一ノ鳥居で寛政八年(西暦一七九六年)木内善治郎の寄進により参道に建立されたもの。安政二年江戸大地震、大正十二年関東大震災、二度にわたり倒壊した。高さ一丈一尺(約三.三 m)柱間一丈(約三 m)明神鳥居。当時を忍びここに設置する。

寒川神社社務所

関東大震災における寒川神社の被害については、『社務日誌』に「午後零時三十分頃大地震起り神社本殿・拝殿・幣殿等皆傾斜、但し本殿ノミ八六尺位後方ニスベル、他ノ天水瓶・御輿殿・手水舎・一ノ鳥居等倒ル、其ノ他社務所破損、随神門・二ノ鳥居傾斜ス」[寒川町(1994)]との記述があり、一ノ鳥居が倒れたことが確認できる。『社務日誌』には 10 月 17 日に内務省技師と技手が被害の実地調査を行ったことが書かれており、『寒川神社志』によればその後本殿はじめ多くが内務省の直轄工事として復旧されたことが分かる[寒川神社(1932)]。そのような中で一之鳥居は篤志家による奉納によって再建された。



図 21 寒川神社に残る震災による一ノ鳥居の残骸

Fig. 21 The torii destroyed by the earthquake in Samukawa Shrine

参道入り口に立つ現在の一ノ鳥居の本殿に向かって右側の柱には「昭和四年十一月建之 施工者上田由次」と書かれたプレートがあり、左側の柱には「奉獻相模鐵道株式会社」というプレートと「施工者 小澤建設工業(株)、設計者(株)中野設計工務、銅板 日本鋳業(株)、昭和五十六年二月吉日」というプレートが貼られている。

震災で倒れた一ノ鳥居に変わって1929(昭和4)年に新たに鳥居が建てられ、その後1981(昭和56)年に銅板張りに改修されたことがわかる。奉納した相模鐵道株式会社は現在のJR相模線で、戦時買収私鉄として1944年6月1日に国有化されるまで、茅ヶ崎駅と橋本駅を結ぶ私鉄であった。震災時には茅ヶ崎駅と寒川駅間で営業運転を行っていた。

(17) JR 倉見駅(寒川町倉見)

相模線の宮山駅から厚木方向へ一つ先の駅が倉見駅である。図22に示すように駅舎は鉄筋コンクリートで古く、大変頑丈そうな建物である。駅前に説明板があり、震災後の1926(大正15)年に相模線が厚木まで伸延された際に建てられたもので、関東大震災直後でもあり、地震や火事に備えるために、さらには補修費の軽減も狙って当時としては珍しい鉄筋コンクリートの駅舎が造られたとのことである。なお、その2つ先の社家駅でも同様の建物が今も駅舎として使用されている。



図 22 震災後鉄筋コンクリートの耐震構造で建てられた倉見駅の駅舎

Fig. 22 Kurami station constructed as an aseismic RC-structure after the earthquake.

(18) 倉見神社(寒川町倉見)

倉見駅から東へ約2 kmのところ倉見神社があり、そこに図23のような記念碑がある。道沿いで外向きに建っているが、神社の入り口から離れていて見つけにくい。記載事項を書きだすと以下のようになる。

(正面)

大震災記念(題額)

大正十二年九月一日正午前二分俄然起レル大震八本縣ヲ中心ニ東京静岡千葉埼玉ノ一府四縣ニ亘リ道路裂ケ橋梁落チ家屋倒レ火災起リ通信絶工運輸ナク惨状其極ニ達ス我ガ倉見八百三十二戸ニシテ全潰九十四半潰三十八死者十二名ヲ出シ物資ノ損害實ニ算ナシ加之餘震屢起リ数月ニ及ビ殊ニ翌年一月十五日午前五時ノ大餘震八最激甚ナリシ嗚呼怖ルベキ八天災地變矣

行安寺廿二世権大僧都補教雲阿法全誌

大正十四年一月 倉見青年會

裏面には、建立に寄与されたと思える36名の名前が刻まれている。行安寺は近くの浄土宗の寺院である。本震の被害に追い打ちをかけた翌年1月15日の丹沢地震のことも書かれており、最後の「嗚呼怖ルベキ八天災地變矣」という言葉が被害の凄まじさを実感させる。

本震の際の倉見村の様子は当時26歳の北村勝乗の日記に見ることができる。「家はつぶれて、自分と時子とヒサ子、家と共にあわやつぶれる処を助かつ



図 23 倉見神社の震災記念碑

Fig. 23 Memorial tower for earthquake disaster in Kurami Shrine of Samukawa.

表 2 石碑に書かれた部落毎の被害

Table 2 Summary of disaster for each village caved on the monument

部落名	戸数	死者	全潰	半潰	焼失	倒潰率	碑の場所
小和田	300	7	125	175		100%	(11)熊野神社
一之宮	176	18	164	12		100%	(15)一之宮八幡
倉見	132	12	94	38		100%	(18)倉見神社
宮山旭	30	1	26	1	3	100%	(19)北部文化福祉

て出る事が出来た。母は家が東へ寝たので、庭であったのがやはり家の下になられて後から出られた。(中略) 町内は全滅の有様で、門沢橋の方を見ても中倉見の方を見ても家は見えない。」[寒川町史編集委員会(2004)]

(19) 北部文化福祉会館(寒川町宮山)

寒川町には震災に関する記念碑が 4 か所あるが、最後は宮山駅の北東約 1 km の北部文化福祉会館にある記念碑で、図 24 のようにこの碑も敷地の外を向いて建っている。この地は近くの旭小学校発祥の地でもある。碑文は以下のようなものである。

(正面)

大震災記念(題額)

大正十二年九月一日午前十一時五十八分関東一帯ニ互リテ大震災アリ相武ノ沿岸被害殊ニ甚シク本村亦頗ル惨状ヲ極ム當町戸数三十而シテ焼失三全潰二十六半潰一全キモノ更ニナク死者一名負傷者三名ヲ出ス實ニ有史以来ノ



図 24 震災復興に尽力した大工父子を顕彰する宮山旭の碑

Fig. 24 Monument tower in honor of the carpenters of parent and child who rendered great services to restoration of people's houses in Miyayama-Asahi village of Samukawa.

悲惨事タリ此ノ時ニ當リ大工職谷澤長蔵君父子挺身家屋ノ復旧ニ従事シ孜孜營々未ダ周年ナラザルニ町民皆安住ノ所ヲ得タルハーツニ君ガ献身的行動ノ賜トイフベシ茲ニ町民八大震災ヲ記念シ君ノ徳ヲ頌センガ為メ石ニ刻シテコレヲ後昆ニ傳フ

大正十三年九月

國幣中社寒川神社宮司 正七位 河村政吉撰

(裏面)

旭町内中

(注)寒川町史編集委員会(1999)記載の正面碑文 1カ所訂正

この記念碑の特徴は、旭町の町民全員が住民の家屋の復旧のために尽力した大工職の父子に感謝し、その功績を讃えたものであるという点である。

§4.まとめ

本稿で調査の対象とした地域は相模川の左岸の茅ヶ崎市ならびに寒川町である。関東大震災でも最も大きな被害を出した地域の一つである。碑文から読み取れる被害の数字を部落毎にまとめて表 2 に示す。倒潰率(焼失を含む)はすべてで 100 %となっている。被害の種類は揺れによる建物倒壊が中心であるが、地盤の液状化被害や断層運動による地盤の隆起による被害など様々であった。

調査をして気が付いたが、松尾大神(茅ヶ崎市今宿)や倉見神社(寒川町倉見)や北部文化福祉会館(寒川町宮山)の記念碑はいずれも敷地の外に向けて建立されており、施設内からの確認がしにくく、返って記念碑の存在を分りにくくする原因となっているが、我々後世に生きるものとして、できるだけ多くの人々に震災の事実を伝えたいという当時の人々の思いを汲むべきであろう。

謝辞

本調査のきっかけは昨年7月14日の茅ヶ崎市文書館において行われた市史講座に筆者が講師として招かれたことにある。その際聴講に来ていただいた地元茅ヶ崎市在住の森本晴夫氏には、後日調査の対象とすべき石碑について貴重な情報をいただいた。記して感謝の意を表します。

対象地震：1923年大正関東地震

文献

- 茅ヶ崎市, 1978, 茅ヶ崎市史 2 資料編(下)近現代, 755 pp.
- 茅ヶ崎市, 1981, 茅ヶ崎市史 4 通史編, 747 pp.
- 茅ヶ崎市文化資料館南湖郷土誌編集委員会, 1995, 南湖郷土誌, 資料館叢書 11, 191 pp.
- 茅ヶ崎郷土会, 1983, ふるさと歴史散歩, 222 pp.
- 池田錦七, 1984, 海前寺誌, 海善寺誌編纂委員会, 78 pp.
- 井上公夫, 2008, 第 部, 第 3 章 震災地応急測図原図と土砂災害, 第 II 部, 震災応急測図原図と土砂災害, 『地図にみる関東大震災』図録(歴史地震研究会編), 日本地図センター, 18-39, 50-61.
- 自治会・五三会, 1990, 柳島うつりかわり, 茅ヶ崎柳島, 144 pp.
- 内務省社会局, 1926, 大正震災志(上巻), 1236 pp.
- 西坂勝人, 1926, 神奈川県下の大震災火災と警察, 警有社, 496 pp.
- 諸井孝文・武村雅之, 2002, 関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定, 日本地震工学会論文集, 2, 3, 35-71.
- 諸井孝文・武村雅之, 2004, 関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定, 日本地震工学会論文集, 4, 4, 21-45.
- 大島英夫, 2011, 高田畊安日記 関東大震災の記述, ヒストリアちがさき, 3, 19-20.
- 寒川町, 1994, 寒川町史 5 資料編 近・現代(2), 684 pp.
- 寒川町史編集委員会, 1999, 近現代の石造物, 寒川町史調査報告 10, 寒川町, 204 pp.
- 寒川町史編集委員会, 2004, 史料紹介・関東大震災の記録, 寒川町史研究, 17, 19-49.
- 寒川神社, 1932, 増補寒川神社志, 284 pp.
- 塩原富男, 1991, 茅ヶ崎の記念碑, 資料館叢書 10, 茅ヶ崎市文化資料館, 157 pp.
- 武村雅之・篠原憲一, 2010, 神奈川県平塚市での関東大震災の跡 慰霊碑巡礼の記録, 歴史地震, 25, 91-100.
- 武村雅之, 2011, 神奈川県秦野市での関東大震災の跡 - さまざまな被害の記憶, 歴史地震, 26, 1-14.
- 武村雅之, 2012, 関東大震災を歩く - 現代に生きる災害の記憶, 吉川弘文館, 328 pp.

